

国際協カイニシアティブ（環境教育）「紙芝居教材」とは

1. 学校とごみ

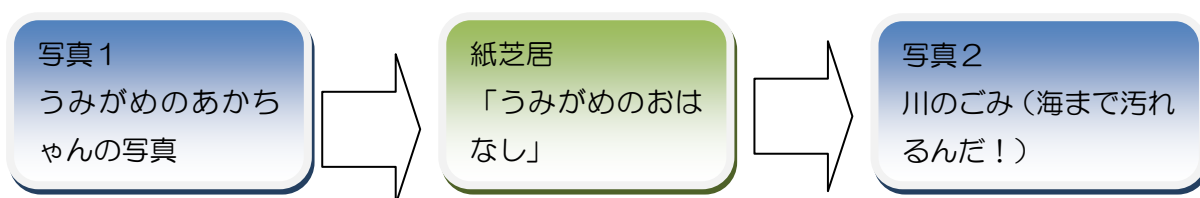
2. 紙芝居教材の意義「新しい」「視覚的」「原稿がある」

3. 教材の紹介

4. 組立てを考える

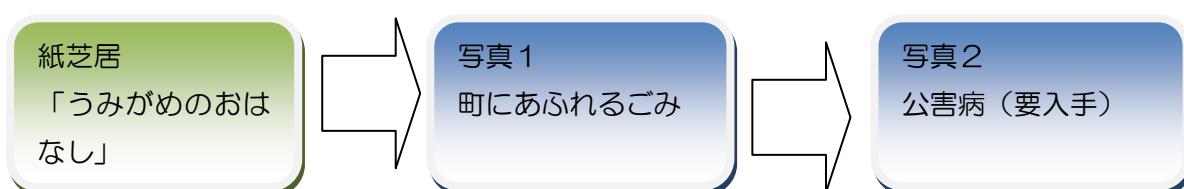
紙芝居教材・視覚教材は、「組み合わせて使う」ための素材です。最低限の素材はそろっていますが、既存の資料を補足したり、現地で撮影した写真を使って、身近な授業を作ります。

例1)



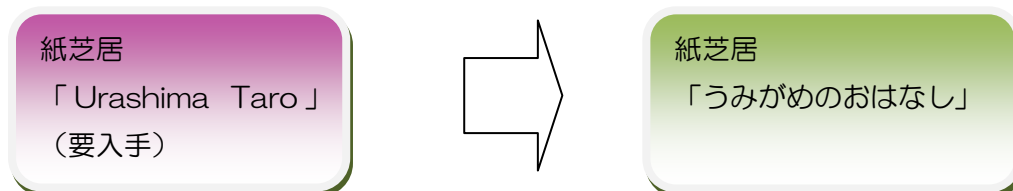
*海の生き物も人間と同じように汚い環境に苦しむ・・・という「循環、つながり」をねらう授業です。子供たちの身の回りの汚染が、人間も含め、じつは人間以外の生き物や、目に見えない遠く的环境まで汚染していることを理解することがねらいです。

例2)



*環境汚染の問題にまったく触れたことがない子供たちには、「ごみを減らすことはよいこと」だと感じてもらうことが目標になります。あふれるごみや汚染された排水は人の健康をを蝕むことを、公害病の問題を語る写真など使いながら、子供たちに考えさせます。

例3)



*日本を紹介する授業の一つとして「浦島太郎」を紹介し、次の時間には「うみがめのお話」に

展開していきます。浦島太郎の挿絵入りのお話は、ウェブ上ではたとえば<http://web-japan.org/kidsweb/folk/index.html>（外務省による、外国の子供たちのための

4 重要な「ポートフォリオ」

日本理解のサイト。英語、スペイン語などで読めます）で見ることができます。

ボランティアの授業が難しい理由はたくさんあります。教室の中で授業を始めるまでも一苦労ですが、いざ教室で授業ができて、思うとおりにいかないこともあります。根底には、コミュニケーションの問題があります。

- ・ 現地の言葉を自由に操れない
- ・ 前提となる知識や文化の違い

現地の言葉を自由に操れない

これは当然のことですから、「できる限り視覚的・体験的授業を行う」ということと、「あらかじめ伝えるべき内容と用語を準備しておく」ことである程度は解決できます。

また語学学習のために、毎日2時間は現地の人と会話する、などの目標を自分の状況に応じて立てましょう。パソコンに向かい合う時間が長くなればなるほど、言葉が上達する機会を逃していると考えてください。

前提条件の違い

何かを教えている時、「なぜ理解してくれないのか」と思ったら、それは相手の理解能力ではなく、教えていること（例えば、プラスチック類のポイ捨てはよくないからやめよう）の前提となっている考え方や知識の違い（ターゲットがプラスチックは生物分解されないものであることを知っているかどうか？）のためではないか、と疑うべきです。ただし、どこがどう違うのか、その場では掘り下げられないことのほうが多いと思います。

このような問題や障害は任期の終わりまで継続して起きることですので、まずは常に**違いに気づくことを楽しむ心構え**が必要です。そして授業の前には、**授業の内容が適切か、理解を求める上でどこかに自分の一方的な思い込みがないか、カウンターパートと打ち合わせ**をします。

相手の生活文化に親しんでいく間に、ボランティアはしだいに違いを理解し、それを埋める授業ができるようになります。しかし、逆に相手（生徒やカウンターパート）に対して、JOCVの言葉の背景にある生活文化を理解するように求めるのは最後まで難しいことです。相手には、**日本体験ができない**からです。相互理解を進めるためにはボランティアが自分の成長した環境を理解してもらうためのプロフィール、それも**なるべく視覚的なもの**を持ち歩くことが重要です。

例えば環境教育分野でいえば、「ごみの落ちていない道路」「自分の家の中」「いつも使っているごみ集積場」「分別回収のようす」「学校のコンポスト」「学校農園」などの写真ですが、**分野にかかわらず、自分の暮らしや家族・町のようす、これまでの成長の過程、専門分野でやってきたことなど、写真ファイルなどのポートフォリオを持参することをお奨め**します。